vol.236

「長尾街道」案内板の設置

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲長尾古道出土の墨書土器（松原市教育委員会提供）

▲長尾古道の側溝遺構（松原市教育委員会提供）

▲案内板裏面（北より）後方に日露戦争記念碑が見える。

▲案内板表面（南より）案内板手前から遺構が見つかった。

長尾街道・中高野街道が交わる阿保茶屋交差点の観光スポット

長尾街道と中高野街道が交わる阿保茶屋交差点北東角（阿保四丁目）の太田正さん所有地に「長尾街道」「河内国　長尾街道」と表裏面に彫られたケヤキ材の案内板が、このたび設置されました。観光ボランティア団体「まつばらまちの案内人」会員である大林寺（融通念仏宗・北新町一丁目）前住職の伊藤孝文さんがつくられたものです。「まつばらまちの案内人」の方々に協力をいただき、和風の屋根も備えられ、古道を行き交う人々の目を楽しませています。

これまで、市域の天美我堂ー布忍駅南側ー松原郵便局や警察署前ー恵我地域を横断する同道には、名称を明示する本格的な表示板が無かったことから、人々に歴史街道として再認識され、観光スポットともなるでしょう。本市では近年、観光に力を入れ、多くの人々が長尾街道や高野街道、あるいは竹内街道を散策されています。こうした案内板や説明板、道路標識が行政・団体・民間などの協力のもと各地に建てられることが望まれます。

長尾街道は江戸時代、堺と大和（奈良県）を結び、商いの道として、また伊勢（三重県）や吉野・長谷（奈良県）方面の社寺を参詣する祈りの道としてにぎわいました（「歴史ウォーク」122）。さかのぼって古代においては、六七二年、『日本書紀』の天武天皇元年に天武天皇が即位する直前の大海人皇子時代、皇位争いをしていた大友皇子の軍が丹比道と並んで大津道を進んだという記述があります。いわゆる壬申の乱での一場面です。丹比道がのちに竹内街道に受け継がれ、大津道が長尾街道となっていったと考えられています。

案内板が建てられた阿保茶屋は、長尾街道と中高野街道の交点にあたりますので、江戸時代以降、大坂方面から高野山（和歌山県）にお詣りする旅人とも一緒になり、休憩所としての茶屋などが何軒も並んでいたようです。今も、由緒ある地名として、この場所でいきづいています（「歴史ウォーク」215）。

案内板は阿保側に設置されていますが、そのすぐ前の道路をはさんだ上田二丁目側からは、今の長尾街道の下に古代の道が敷かれていたと考えられる道路遺構が見つかっています。現在の街道は幅六mほどしかありませんが、昭和五十七年（一九八二）、住宅建設にともなう松原市教育委員会による事前調査で道路に平行する道路側溝と考えられる幅約一七〇cm、深さ約三〇cmの溝を検出しました。また、道路部分に相当する面の高さは、側溝の肩の高さよりも約二〇cmほど高くなっており、上面は平らに整地されていました。溝からは須恵器や土師器などの遺物が出土し、土師器の底に文字が書かれた皿も見つかりました。

当時、これらの出土遺物が六世紀末から七世紀初めごろとされたことから、壬申の乱における大津道の一大発見と大々的に報道されました。同年十月十四日付の『毎日新聞』には「難波宮と飛鳥を結んだ 幻の古代〝国道〟大津道の発見 松原「壬申の乱」の舞台にも」という大見出しがおどっています。

ただ、その時の調査地点が狭く、その後の出土遺物の再検討によって、今では八世紀の奈良時代ごろではないかという見解も出されています。それでも、古代の道路幅は今より広く、現案内板の設置されている場所は、長尾古道上であったと思われます。古代の幹線道は幅二〇m前後のものが各地で検出されていますので、今後とも長尾古道の調査事例が待たれます。

阿保茶屋交差点をはさんで西方の松原中央公園前（高見の里二丁目）や東方の西野々会館（西野々二丁目）あたりの長尾街道沿いには「大道浦」という小字名が残っており、立派な古道の存在が想定されます。

今回の案内板設置以来、多くの方々に関心を持っていただいており、伊藤さんらは「中高野街道・阿保茶屋」の案内板も同所に建てたいと計画しています。